

昭 20	昭 19	昭 17			昭 16	年 月 日	概 要
3		7	3	1	1		
29	頃		不明	25	20		
<p>軍令陸甲才五号により陸軍需品廠臨時編成下令 東京において編成完結</p> <p>奉天陸軍需品支廠大連出張所設置</p> <p>編成改正により陸軍需品廠大連出張所に改編</p> <p>爾後在満部隊に対し、被服、糧秣等軍需品の補給業務に従事</p> <p>より軍用、戎克船による高粱、大豆、塩等の内地（唐津港）との輸送業務開始</p> <p>軍令陸甲才五三号臨時編成下令、関東軍需品廠臨時編成により同廠大連出張所を編成、前記業務を分離し軍需品補給業務を実施、陸軍需品本廠大連出張所は軍用戎克船による輸送業務を実施するよう改編</p>							<p>陸軍需品本廠大連出張所略歴</p> <p>（奉天陸軍需品支廠大連出張所）</p> <p>通称号 満才三三三部隊 満才五三二部隊</p>
							摘 要

同時に安東集積所を七月には營口駐在所を設置

大連出張所長 主中佐 埴 純

安東集積所長 初代主大尉 儘 田 吟次郎

二代主大尉 福 島 光 昭

營口駐在所 主大尉 儘 田 吟次郎

関東軍経理部の監督下に建造された戎克船を大連、安東、營口等において検査、受領し、山下特殊帆船船株式会社を監督し運航業務にあたらせた。運航業務の内容はつぎのとおりである。

1. 船員の募集、教育、配乗等にあたる。(船員の主力は満人の経験者を採用し満人徴用者、朝鮮人等を使用、さらに日本人漁夫を徴用配属し幹部とした。)

2. 関東軍と連絡し塩、高粱、大豆、豆粕等を集荷積載し大連、安東等より唐津、仙崎、広島等に輸送した。

3. 四月以降戎克船警乗要員として下士官以下約二〇〇名を配属されたが七

	昭 22	昭 21				
	4	3	7	12	8	8
	初旬	下旬		頃	23	22
	佐世保上陸、復員	大連集結、大連港出発	三十里堡付近の「乙」軍飛行場設定作業	金州付近の「乙」軍飛行場の設定作業	解体、「乙」軍宿舎の準備軍需品の転送作業等に従事。	大連港外砂河口戎克工場に移動、数日後対岸の満洲重機会社に移動し機械の船員を解備
					大連出張所	日「ソ」開戦
					閔東州警備隊司令官の指令により武装解除	月下旬頃より飛行機、潜水艦等の攻撃をうけ戎克船の損害甚大となつたので出航を中止し警乗兵の配乗も取止めたので見習士官以下約三〇名を陸軍需品本廠京城出張所に転出させた。

	10	9	9	9	9	8	8	8
	30	28	19	18	2	26	20	15
	<p style="text-align: right;">安東集積所</p> <p>停戦となり船員の全員を解散</p> <p>軍属を解散</p> <p>武装解除されたが小銃一〇〇挺、小銃弾五〇〇発を貸与され安東市内の警備にあたった。</p> <p>下士官以下大多数の者が解散した。この際武器は隣接警備隊に引継いだ。</p> <p>残留の母校七名は安東駅集合の命をうけたが五名集合二名は市内の民家に残留した。</p> <p>安東駅集合の五名は奉天に輸送中一名は蘇家宅にて別行動となり四名は奉天北陵に収容</p> <p>奉天出発</p> <p>黒河経由入「ソ」</p> <p>安東市内残留者は中共軍に留用され連山関付近において国府軍との戦闘に参加させられたが脱出し、十一月十六日博多に帰還した。</p>							

	10	8
	15	25
	奉天北陵に集結入「ソ」	營口駐在所 同地駐在中の儘田大尉は奉天にいたり関東軍需品廠に合流

							年
							月
							日
						昭 20	
8	8	4	4	4	4	3	
13	9	29	中下旬	中下旬	上中旬	30	
<p>以後本部以下（除才三中隊）京城に駐屯 爾後大本營参謀部および朝鮮軍司令部との通信連絡に従事 才三中隊は羅津に派遣され羅南師管区司令官の直属となり朝鮮軍司令部才三 通信隊本部並びに大本營参謀部との通信に任ず 日「ソ」開戦 以後才三中隊長以下器材移動のため羅南より致度にわたり京城に南下 中隊の一部約六〇名は羅南師管区司令部通信要員として羅南師管区司令部と</p>							概
							要
							摘
							要

大本營陸軍第三通信隊第三中隊の一部略歴
通称号 築才一三三七八部隊

			8	8
			19	15
			以後所在部隊を同行動	古茂山に収容され武装解除
		中隊長		停戦
		中尉 根岸正恒		行動を共にす。